

静岡県中部地区の某大学学生における歯科保健行動の現状と課題

Current Status and Problems of Oral-Health Attitudes in a Certain College Students in
Area of Central Shizuoka Prefecture

山本 智美 森野 智子 吉田 直樹 古賀 震

YAMAMOTO Tomomi, MORINO Tomoko, YOSHIDA Naoki, KOGA Shin

I. はじめに

学校保健安全法施行規則¹⁾によれば、大学では「歯及び口腔の疾病及び異常の有無」を健康診断の検査項目から除くことができるため、大学での歯科検診は義務付けられていない。そのため大学生の口腔内の状態や歯科保健行動に関する報告は少ない^{2), 4) - 7), 12)}。また大学生に関しては国立大学法人保健管理施設協議会による「学生の健康白書」がまとめられており、「学生の健康白書 2005年」²⁾では4大学(9,006人)の歯科検診結果が報告されているが、対象学生は限定されている。その後「学生の健康白書 2010年」には歯科検診結果の報告はなく、実施の有無は不明である。高校生までは学校歯科検診が実施されており、歯・口腔の状態について知る機会があるが、卒業後、自ら行動を起こさない限り歯や口腔の状態を知る機会はない。また、平成23年歯科疾患実態調査³⁾によれば、5歳以上10歳未満においては現在歯に対し、う歯をもつ者は10%であったが、20歳以上80歳未満の各年齢層では80%以上にのぼっている。成人期におけるう歯罹患率は、過去の同調査と比較しても、あまり変化はなく高値を示している。また同調査において歯肉に所見のある者の割合は、20~24歳で74.2%であった。このような傾向は70~80歳代になるまでの続き、成人期初期には歯周病、う歯に罹患する者が増加する傾向がみられる。大学生になると高校までの生活とは大きな変化が生じ、また青年期から成人期にかけては大学生活だけではなく就職活動・就職、その後、結婚、妊娠・出産、子育て等、生活環境の変化の著しい時期が続く。近年の研究から歯周病と糖尿病等の全身疾患、歯周病と早産・低体重児出産の関連等、歯周疾患と全身との関連が指摘され、またう歯を引き起こすミュータンスレンサ球菌の母子感染等、う歯・歯周病等の歯科疾患は、自身の口腔だけでなく全身の健康や未来の子どもにも影響を及ぼす可能性がある。超高齢社会を迎える、歯や口腔の健康の保持増進は全身の健康や生活の質(QOL)向上に寄与する因子の一つであると思われる。大学生に代表される高校卒業後の世代の人々の歯科保健行動の向上は重要課題であると考えられる。そこで大学生の歯科保健行動の現状を把握し課題を考察することを目的として、大学生の歯科保健行動の実態に関する調査を実施したので報告する。

II. 対象および方法

静岡県中部地区にある大学の医療・福祉系の学部生と短大部学生（歯科関係の学部ではない）、計566人中、協力を得た127人を対象に、歯科保健行動の現状に関する無記名の自記式質問紙調査を実施した（平成27年12月～28年1月実施）。未回答があった9人を除いた118人を対象に分析を実施した（有効回答率：92.9%）。質問項目は、1) 現在の口腔内の状況、2) 歯科受診状況、

3) ブラッシング状況、4) 間食状況である、5) お口のチェックコーナーへの関心についてである。そのほか生活習慣についても質問したが、今回はそれを除いた結果について報告する。また、質問紙調査の実施にあたっては、資料を配布し口頭で説明した後、同意を得た者を対象とした。分析に際し、有意差の検定には χ^2 検定を用い、解析はSPSS Ver21.0を用い実施した。統計的有意水準は危険率5%未満とした。また、倫理的配慮として本研究は、静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認を受け実施した(受付番号27-32)。

III. 結果

回答者の属性は短大生66.1%、学部生33.9%、年齢は19.4歳±1.1、男子学生7.6%、女子学生92.4%であった。

1) 現在の口腔内の状況

現在の口腔内の状況について10項目を5件法(「そう思わない」:5~「そう思う」:1)で質問した結果、「そう思う」「どちらかというとそう思う」と回答した者が多かった項目は、「歯並びや噛み合わせが気になる」46.6%、「歯石がついている」42.4%で、少なかった項目は、「歯ぐきが赤く腫れているところがある」8.5%、「親知らずが痛む、腫れる」14.4%、「口を開けたり閉じたりする時、頸が痛む」14.4%などであった(図1)。口腔内の状態への関心については「ある」30.5%(36人)、「少しある」59.3%(70人)で、口腔内の状態に関心のある者は合せて90.3%(106人)であった。

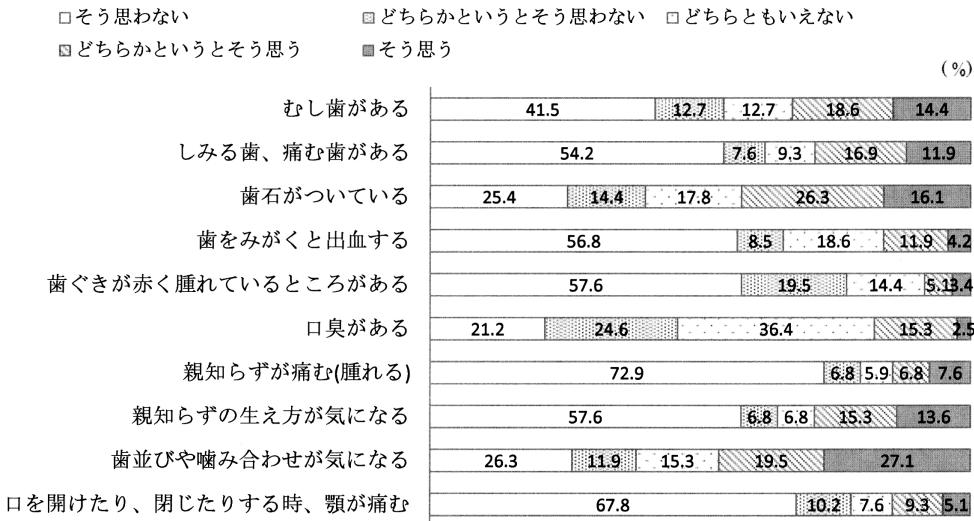


図1 現在の口腔内の状況について

(n=118)

2) 歯科受診状況

過去に歯科受診経験のある者は97.5%(115人)であった。受診理由(複数回答)は「むし歯の治療」70.3%(83人)がもっとも多く、「学校歯科健診で治療勧告書をもらった」42.4%(50人)、「定期検診(予防のため)」28.8%(34人)の順であった(図2)。歯科医院での歯科保健指導を受けた経験について、「ある」54.2%(64人)、「ない」36.4%(43人)であった。また、過去一年間に定期検診

静岡県中部地区の某大学学生における歯科保健行動の現状と課題

を受診した者は 33.9%(40 人) であった。

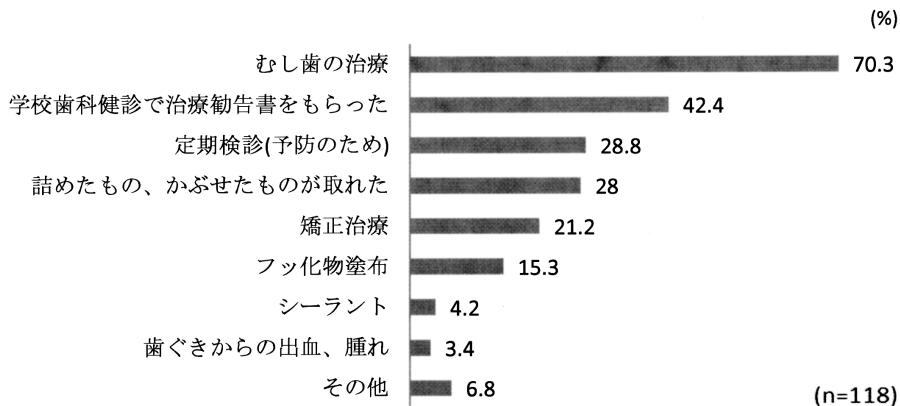


図 1 これまでに歯科を受診した理由

また、調査対象の大学生のうち短大生は入学時に大学で歯科検診を実施している。回答した短大生 78 人のうち歯科検診実施後、歯科を受診したか質問したところ「受診した」 41.0% (32 人)、「受診しなかった」 59.0% (46 人) で、受診しなかった者に理由を質問したところ「検診結果に問題がなかった」 56.5% (26 人)、「受診する時間がなかった」 10.2% (12 人)、「受診が面倒だった」 4.3% (2 人)、「受診の必要はあったが気にならなかった」 2.2% (1 人) 等であった。

3) ブラッシング状況

歯をみがく回数は「2 回」 71.2% (84 人) がもっとも多く、次いで「3 回」 16.9% (20 人) であった。歯みがきの場面、状況（複数回答）では、「朝食後」 82.2% (97 人)、「就寝前」 75.4% (89 人) が多く、「夕食後」 27.1% (32 人)、「昼食後」 15.3% (18 人) となっていました。間食後に歯みがきする者は 1.7% (2 人) でほとんどいなかった。歯みがき時に歯ブラシ以外に使用するものの有無については、使用するものが「ある」 17.8% (21 人) と歯ブラシ以外の清掃用具を使用している大学生は少ない傾向がみられ、使用している歯ブラシ以外の清掃用具について質問したところ（複数回答）、「糸ようじ」 52.3% (11 人)、「デンタルフロス」 33.3% (7 人)、「歯間ブラシ」 19.1% (4 人) であった。また、フッ化物がう蝕予防に有効であることについては、「知っている」 42.4% (50 人)、「少し知っている」 32.2% (38 人)、「あまり知らない」 16.9% (20 人)、「知らない」 8.5% (10 人) で、「知っている」「少し知っている」を合わせ、「知っている」と回答した者は 74.6% (88 人) であった。

4) 間食の状況

間食の有無については、「時々間食する」（週 3～4 日） 42.4% (50 人)、「ほぼ毎日間食する」 41.5% (49 人) と、間食する習慣のある者は合せて 83.9% (99 人) で多い傾向がみられた。間食する食べ物としては、「甘いお菓子」 78.8%、「スナック菓子」 31.4%、「果物」 29.7%、「ガム」 17.8%、「せんべい」 14.4%、「ガム（特定保健食品マーク付き）」 10.2%、飲み物では「緑茶、ウーロン茶等」 66.9%、「カフェオレ、ミルクティ等（砂糖入り）」 43.2%、「炭酸飲料」 23.7%、「果汁ジュース（100%）」 22.9%、「清涼飲料水」 20.3%、「牛乳、豆乳」 17.8%、「野菜ジュース」 9.3%、「スポーツドリンク」 6.8% であった。間食する食べ物は甘いお菓子が多く、飲み物は緑茶等のお茶系が多くみられた。

表1 これまでの歯科受診の理由と過去一年間の定期検診受診の有無との関連

		過去一年間の定期検診受診 あり	なし	p値
むし歯の治療	あり なし	27 (67.5%) 13 (32.5%)	56 (71.8%) 22 (28.2%)	0.629
歯ぐきからの出血、腫れ	あり なし	1 (2.5%) 39 (97.5%)	3 (3.8%) 75 (96.2%)	0.702
詰めたもの、かぶせたものが取れた	あり なし	9 (22.5%) 31 (77.5%)	24 (30.8%) 54 (69.2%)	0.343
定期検診	あり なし	21 (52.5%) 19 (47.5%)	13 (16.7%) 65 (83.3%)	0.000***
学校歯科健診での治療勧告書	あり なし	16 (40.0%) 24 (60.0%)	34 (43.6%) 44 (56.4%)	0.709
矯正治療	あり なし	4 (10.0%) 36 (90.0%)	21 (26.9%) 57 (73.1%)	0.033*
フッ化物塗布	あり なし	5 (12.5%) 32 (87.5%)	13 (16.7%) 65 (83.3%)	0.551
シーラント	あり なし	1 (2.5%) 39 (97.5%)	4 (5.1%) 74 (94.9%)	0.502

 χ^2 検定 *p<0.05, ***p<0.001

(n=118)

表2

口腔内の状況への関心、ブラッシング指導経験、歯みがき時に歯ブラシ以外に使用するもの、フッ化物のう蝕予防効果(知識)、間食の状況と過去一年間の定期検診受診の有無との関連

		過去一年間の定期検診受診 あり	なし	p値
口腔内の状況への関心	あり なし	36 (90.0%) 4 (10.0%)	70 (89.7%) 8 (10.3%)	0.965
ブラッシング指導経験	あり なし	24 (64.9%) 13 (35.1%)	40 (57.1%) 30 (42.9%)	0.438
歯みがき時に歯ブラシ以外に使用するもの	あり なし	13 (32.5%) 27 (67.5%)	8 (10.3%) 70 (89.7%)	0.003**
フッ化物のう蝕予防効果	知っている 知らない	29 (72.5%) 11 (27.5%)	59 (75.6%) 19 (24.4%)	0.711
間食の状況	間食する 間食しない	37 (92.5%) 3 (7.5%)	62 (79.5%) 16 (20.5%)	0.069

 χ^2 検定 **p<0.01

(n=118)

5) お口の状態チェックコーナーへの関心

本学で簡単にお口の状態をチェックするコーナー(一人あたり所要時間5分程度)を設けた場合、「受けてみたい」25.4%(30人)、「少し受けてみたい」39.0%(46人)と口腔内状況のチェックに関心のある者が約6割であった。

6) 過去一年間の定期検診受診と質問項目の関連について

これまでの歯科受診の理由と過去一年間の定期検診受診の有無との関連について検討したところ、「定期検診」($p=0.000$, $p<0.001$)、「矯正治療」($p=0.035$, $p<0.05$)に有意な差が見られた(表1)。「口腔内の状況への関心」、「ブラッシング指導経験」、「歯みがき時に歯ブラシ以外に使用するもの」、「フッ化物のう蝕予防効果についての知識」、「間食の状況」と「過去一年間の定期検診受診」との関連について検討したところ、「歯みがき時に歯ブラシ以外に使用するもの」との間に有意な差がみられた($p=0.003$, $p<0.01$)。そこで、補助清掃用具の使用がブラッシング指導の経験と関連している可能性があると思われたため、「ブラッシング指導経験」の有無と「歯ブラシ以外に使用するもの」の有無の関連について検討したが、有意な差は見られなかった($p=0.827$)。また「口腔内の状況への関心」、「ブラッシング指導経験」、「フッ化物のう蝕予防効果についての知識」、「間食の状況」と「過去一年間の定期検診受診」との間には有意な差は見られなかった(表2)。

IV. 考察

本調査の結果から過去に歯科受診経験のある者は95%以上と高い割合を示しており、その理由の多くは、う蝕の治療がもっとも多かったが、現在は歯石沈着や歯並び、噛み合わせ等、咬合や審美的な点を気にかけている大学生が多い傾向がみられた。また歯肉からの出血や歯肉の腫れを気にしている者は少なく、歯石沈着には気づいているものの歯肉炎等、歯周疾患への関心は薄いのではないかと思われた。森下ら⁸⁾の報告によれば、歯肉炎ありと診断された生徒の健診結果の認知度は、う蝕に比べ一致率が低く、これは小中学校での歯科保健指導がう蝕に偏っており、歯肉炎への対応が十分でないことが原因の一つであると考えられると述べており、大学生においても歯石沈着が歯肉炎等の可能性と一致していない可能性があると推測された。また、過去の歯科受診理由のうち、定期検診と矯正歯科治療において、過去一年間の定期検診受診の有無と関連していたことから、もともと定期検診を受診していた口腔に関心の高い者や、矯正歯科治療後、定期検診を受診する者がいることが推測された。さらに、Kleges⁹⁾によれば、歯列の審美性と毎日のブラッシング頻度とフロッシング、歯科受診において有意差があったと報告していることから、矯正歯科治療を行った者は、歯列などが整い口腔内への関心が高くなると考えられ、そのような状況が定期検診を継続させているのではないかと思われた。

また森下ら¹⁰⁾は、歯学部学生でも1日2回のブラッシングがほとんどであると述べていることから、対象者の一般の大学生の多くが1日2回のブラッシングであることや、1日3回磨く者も16.9%いることなどからブラッシング習慣はある程度身についていると思われた。歯ブラシ以外に使用する補助清掃用具については使用していない者が多く、過去一年間の定期検診受診については33.9%とやや低い傾向がみられたが、「過去一年間の定期検診受診」と「歯みがき時に歯ブラシ以外に使用するもの」との間に関連がみられ、一方、「歯みがき時に歯ブラシ以外に使用するもの」と「ブラッシング指導経験」との間に関連がみられなかったことから、補助清掃用具の使用は、大学生からの関心による行動の表れであることが推測された。ブラッシングが単なる習慣ではなく、う蝕や歯周疾患の予防を意識してブラッシングを実施するためには、プラークをより効果的に除去する補

助清掃用具の使用は必要不可欠であり、定期検診を受診することにより口腔内の状況を把握し予防への意識がさらに高まり、良好なセルフケアを実践していくことが可能になると思われた。

田北ら¹¹⁾によれば対象の大学生の口腔評価指数の平均値において、男性に比べ女性の方が優位に高い結果となり、また男性に比べ女性の方が歯科受診・受療行動でも高い傾向があると述べている。また、小林ら¹²⁾は歯学部学生において男性より女性の方が良好な歯科保健行動をとる傾向があり、「定期検診受診」は、「歯肉出血の有無」や「フッ素入り歯磨き粉の使用」、「鏡を見て磨く」といった望ましい歯科保健行動との間に有意な関連を示したと述べている。今回の調査対象者のほとんどが女性であり、定期検診受診と補助清掃用具の使用との間に関連がみられたことから、対象の大学生のセルフケアへの関心が高く同様の傾向があると思われた。良好な歯科保健行動である定期検診受診には、セルフケアへの関心を高めることが必要であると考えられた。

また、回答者の間食の頻度は高く、甘いお菓子を好む傾向がみられたが、飲み物ではお茶等を好んで飲んでいる者が多いことがわかった。「間食の状況」と「過去一年間の定期検診受診」との間に有意な関連がみられなかったことから、甘いお菓子がう蝕の原因になると一般的には考えられているが、間食するものとう蝕との関係についての関心は低いことも推測された。一方でお口の状態チェックコーナーへの関心は約6割であり、潜在的に自分の口腔への興味、関心がある者がある程度いることが推測された。

短大生の大学での歯科検診後の行動については、約4割が歯科を受診しており、検診結果に問題がない場合を除き、受診しなかった者は2割程度であることから、大学での歯科検診が歯科受診を促す要因の一つになった可能性があると思われる。

本調査において、大学生の過去一年間の定期検診受診と歯ブラシ以外の清掃用具の使用について関連がみられたことから、セルフケアへの関心を高めることが歯科保健行動を変容させるきっかけになると考えられた。大学における歯科検診は、大学生の歯科保健行動にプラスに働く可能性も示唆された。

V. おわりに

一般の大学生に対してセルフケアへの関心を高めることは、歯科保健行動の変容に関連すると考えられ、今後は、大学生が集まる場を活用した歯科保健行動を促す取り組みについて検討したいと考える。

なお、この論文の一部は日本歯科衛生学会第11回学術大会において発表した。

引用参考文献

- 1) 学校保健安全法施行規則（昭和三十三年六月十三日文部省令第十八号），最終改正：平成二八年三月二二日文部科学省令第四号
<http://law.e-gov.go.jp/htmlldata/S33/S33F03501000018.html> (2016年12月12日アクセス)
- 2) 学生の健康白書に関する特別委員会編：学生の健康白書 2005、国立大学法人保健管理施設協議会、2007.
- 3) 厚生労働省：平成23年歯科疾患実態調査、
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/62-23-01.pdf> (2016年12月12日アクセス)
- 4) 引地尚子、高橋由希子、久保田浩三、園木一男、千綿かおる、村岡宏祐、笠井宏記、中村太志、

静岡県中部地区の某大学学生における歯科保健行動の現状と課題

- 日高勝美、柿木保明、西原達次、福田仁一：九州歯科大学新入生口腔健康診断の検討（その1）－新入生口腔健康診断の概要－、九州歯科学会雑誌、65(2)、31-39、2011.
- 5) 大木明子、門田千晶、松崎雅子、大橋克巳、高戸毅、初野有人：大学新入学時の口腔健康状態に対する意識および歯科保健行動に関する検討、口腔衛生学会雑誌、59 (5)、553-561、2009.
- 6) 三浦宏子、上田五男、磯貝恵美子ほか：大学生における歯科疾患状況と歯科保健行動について - 東日本学園大学歯学部と薬学部学生との比較研究 - 、口腔衛生学会雑誌、39、9-15、1989.
- 7) 引地尚子、金久弥生、吉野賢一、柿木保明、辻澤利行、秋房住郎、井上博雄、尾崎由衛、榎原葉子、遠藤真美、西原達次、福田仁一：九州歯科大学新入生口腔健康診断の検討（その2）－新入生口腔健康調査の概要－、九州歯科学会雑誌、65(2)、40-47、2011.
- 8) 森下真行、徐淑子、原久美子、松本厚枝：高等学校における学校歯科保健活動に関する研究 第1報 歯科健診結果の認識と受療行動、口腔衛生学会雑誌、50 (2)、231-235、2000.
- 9) Kleges U,Bruckner A,Guld Y et al.:Dental esthetics,ortho-dontic treatment, and oral-health attitudes in young adults. Am J Orthod Dentofacial Orthop 128:442-449,2005.
- 10) 森下真行、宮城昌治、島津篤、田中孝子、山崎由紀子、岩本義史：歯学部生のブラッシング習慣とブラークコントロールの状況、口腔衛生学会雑誌、48 (3)、277-284、1998.
- 11) 田北順平、松本真佐美、中村雅子、松岡重信：大学生における生活習慣得点と口腔内状態について－男女及び学年間の比較より－、福山平成大学福祉健康科学研究、9(1)、15-22、2014.
- 12) 小林莉子、吉岡昌美、松山美和、日野出大輔：大学歯学部生における口腔健康状態に対する意識および歯科保健行動、四国公衆衛生学会雑誌、61(1)、81-85、2016.

(2016年12月19日 受理)